IWATE MEDICAL UNIVERSITY NEWS

岩手医科大学報

2021. 3 No.534

主な内容

特集――――震災から10年
～医療復興を目指した災害復興事業本部の取り組み～
トピックス――令和２年度卒業式が挙行されました
トピックスプラス―最終講義が行われました
フリーページ――すこやかスポット医学講座No.99
「足の裏のほくろ」

表紙写真：令和２年度岩手医科大学卒業式
卒業生代表謝辞看護学部第１期生 佐々木瑞恵さん（関連記事ｐ.9）

特集

震災から10年
～医療復興を目指した災害復興事業本部の取り組み～

平成23年3月11日に起きた東日本大震災から今年で10年が経過しました。震災後、本学では医療復興を目指し、学内に災害復興事業本部を設置しました。本稿では、災害復興事業本部の取り組みと今後の展望について紹介します。

■ 災害復興事業本部

本学附属病院は岩手県の基幹災害拠点病院として、東日本大震災発災直後から全力を挙げて医療支援活動を行ってまいりました。岩手県の地域医療の安定充実を使命とする本学は、今後も長期的に医療支援を継続するとともに、一日も早い医療の復興に向けて最大限の努力を行ってまいります。また、東日本大震災を通じて得られた教訓を学問的に体系立て、将来起こりうる大災害に備え、有為な医療人を育成することが被災地にある本学に課せられた責務であると考えております。

災害復興事業本部長 祖父江 憲治 学長

◆概要

【災害時地域医療支援教育センター】

東日本大震災を受け、災害時の緊急医療支援体制を含む総合的地域医療支援体制を拡充・強化するため、震災をふまえた研究活動の推進、実践としての災害医療教育による人材育成、他機関との有効な連携システムの研究・構築に取り組んでいます。館内には備蓄倉庫や情報ネットワーク管理室があり、バックアップ機能を備えたサーバーへ診療データを保存しており、災害時を含めた地域医療支援のための設備が整っています。

【いわて東北メディカル・メガバンク機構】

震災による沿岸被災地域の医療復興支援の一環として、平成24年に設立された「いわて東北メディカル・メガバンク機構」は、沿岸の県立病院への医師の派遣や、被災地域を中心に住民の方々にご協力いただき健康調査を実施しています。その際に提供を受けた健康情報と生体試料をバイオバンクとして構築し、ゲノム情報等を解析します。また、全国の研究機関と連携しながら研究を行い、地域医療の向上、震災による健康への影響を解析し、個別化医療・個別化予防等の医療の実現を目指しています。

【岩手県こころのケアセンター】

矢巾キャンパスの中央センターを中核に、沿岸4拠点の地域センターや関係機関と連携しながら、岩手県沿岸部の震災後のこころのケアや健康づくりに取り組んでいます。震災から10年経った今も被災者の多くが様々な生活の困難やストレスを抱えています。今後のケアセンターでは幅広いメンタルヘルス対策を行っていきます。

【いわてこどもケアセンター】

震災による様々なストレスを抱えたこどもたちのこころのケアを中長期的に行っています。わが国でも実践例が少ないこどもの外傷性悲嘆に対応したトラウマ焦点化認知行動療法(TF-CBT for CTG) など、国内外の専門家との連携により、先進的な治療を提供しています。若手医師の実地修練や多職種症例検討会などの支援者研修による専門職育成にも力を入れ、こころのケアの中核的な施設として活動していきます。

■ 災害時地域医療支援教育センター

◆日本災害医療ロジスティクス研修

平成 23 年 3 月 11 日に発災した東日本大震災時に、いくつかの医療支援チームは被災地に関する情報不足、ガソリンや食料不足など、ロジスティクス面の不足により十分な活動を行えなかったとの報告がありました。そういった脆弱な部分を改善するために、平成 25 年度から日本災害医療ロジスティクス研修を開催しています。

本研修は、組織の枠を超えた全国で唯一の災害医療ロジスティクスのための大規模研修であり、これまでに 46 都道府県から延べ 450 名近い受講生を輩出しています。また、過去に本研修を受講した方がタスク（指導者）として参加することで屋根瓦式の指導体制となり、本研修の質の向上に加え全国的な災害対応医療人の育成や受講生同士の関係強化にも繋げています。

沿岸被災地での本部運営訓練

◆人材育成（各種研修会等）

災害医療研修会における本部運営

岩手県内の医療従事者、救助関係者、行政職員の密な連携及び災害医療の実践力の強化を目的とし、岩手県より委託を受け人材育成・強化のための研修を開催しています。岩手 DMAT 隊員や災害医療コーディネーターの養成・スキルアップ研修、保健所職員・市町村役場職員の災害医療に関する知識の共有を図り、災害時に岩手県内で災害対応に携わる方々に対し、職種を越えて災害医療について学んでいただくために、多岐にわたる研修を複数開催しています。また、災害医療研修会は、「災害医療とは何か」という初歩的な概論から、災害発生時の院内初動対応、慢性期における避難所運営など実践に即した内容まで、講義や演習を通して災害医療全般を網羅して修得できる内容となっています。

◆今後の展望

東日本大震災以降も西日本豪雨災害、北海道胆振東部地震、令和元年台風 19 号災害と、国内で頻発する自然災害は後を絶たない状況であり、将来発生が懸念されている南海トラフ地震・首都直下型地震への備えも喫緊の課題であります。また、新型コロナウイルス感染症への感染リスクがある中で大規模災害が発生しないとも限りません。当センターは、医療関係者、行政職および救助関係者への研修会の実施や災害医療を下支えするロジスティクス関連の研修、小学校～高等学校での災害時の医療への理解を深めてもらう講座等、さまざまな研修会を開催し、被災地岩手から今後の大規模災害に対応できる人材を育成し、一人でも多くの命を助けることのできる仕組みを発信し続けていきたいと考えています。

（文責：災害時地域医療支援教育センター）

■ 岩手県こころのケアセンター

◆取り組みの概要

感染対策を取り入れた個別相談室

岩手県こころのケアセンターは、岩手県の委託事業として、平成２４年２月に沿岸住民の中長期的なこころのケア活動を行う拠点を本学に設置し、同年3月には、沿岸4か所に地域こころのケアセンターが設置されました。発災以降、全国から派遣されたこころのケアチームの活動を引き継ぎ、被災地における精神保健医療行政および精神医療サービスの機能を補完する役割を担うため、活動を続けてきました。具体的な活動としては、１）訪問活動などを通じた被災者支援、２）震災こころの相談室による精神科医師・精神保健専門職による個別相談、３）市町村等の地域保健活動への支援、４）従事者支援、５）包括的な自殺対策、６）そのほか地域のニーズによる活動を骨子として、沿岸保健所や市町村、関係機関と連携して活動を行ってきました。被災地では医師不足も顕著であり、岩手県内精神科医療機関だけでなく、全国講座担当者会議（令和２年度は３０大学）、日本精神科救急学会（令和元年度で支援終了）の協力も受けながら、活動を行ってきました。現在、新型コロナウイルス感染症拡大により被災地はさらに深刻な影響を受けており、感染対策を取り入れながら、事業を継続しています。

久慈地域こころのケアセンタースタッフによる被災自治体職員管理職対象のメンタルヘルス研修会

◆被災地におけるメンタルヘルスの向上

岩手県こころのケアセンターによる被災地のこころのケアの活動は、岩手県の保健医療計画や岩手県民計画における震災復興プラン（被災者のこころのケアの推進）、岩手県自殺対策アクションプランにおいて重要な領域に位置付けられています。令和２年も岩手県東日本大震災津波復興委員会や、復興大臣や政務官などの国の視察において、岩手県での被災地のこころのケアの重要性や長期的な支援活動の必要性について説明を行ってきました。

また、岩手県議会の国への自殺防止策の強化を求める意見書において、東日本大震災津波被災地でのこころのケアセンターによるこころのケア対策が必要な期間、十分に実施されるための財源確保を国への要望としてあげていただきました。岩手県ゲートキーパーテキスト作成の協力など、岩手県被災地のメンタルヘルスの向上に協力してきました。

◆今後の展望

震災からのこの 10 年、被災された方々は、避難所から仮設住宅、災害公営住宅や自宅再建への移動を余儀なくされ、さらに復興への期間が延長している状況下において、被災者は時間の経過とともに医療費、経済的自立、高齢化など、現実的な生活の様々な困難を抱え、持続的なストレスにさらされています。そして、住民同士の繋がりが減弱し、地域との結びつきの希薄さ、孤独などの問題は、インフラが整備された後にも継続していきます。加えて、被災地で働く自治体職員や復興関連業務従事者、対人援助職等の勤労者のストレス加重も深刻な問題です。コロナ禍においてはリスクがさらに高まりました。住民が安心して暮らせるようになるためには、こころのケアが復興支援として継続され、相談対応や健康づくり推進、相互交流・支援を深化させ、健康格差へ配慮する視点が求められます。そして、見守り、コミュニティ形成や実務者派遣、被災者の救済制度など様々な支援活動も継続される必要があります。災害後の現実的な社会的援助がメンタルヘルスに関連するため、長期的な視点で対人支援と健康づくりの継続的な支援が必要であり、そのためにも、引き続き被災地域の復興のため、地域と連携した活動を続けていきます。

（文責：岩手県こころのケアセンター）

■ いわて東北メディカル・メガバンク機構（IMM）

◆医療の復興に向けて～健康調査と情報提供～

地域・行政・関係機関の皆さまのご協力・ご支援の下、こころとからだの健康保全と医療復興に貢献することを第一の目的に、被災地域を中心とした岩手県住民の皆さまの詳しい健康調査やアンケートによる追跡調査等を実施しました。ベースライン調査（2013～2016年度）では約3.3万人、その後の詳細二次調査（2017～2020年度）では約2.4万人の方にご協力いただきました。また、沿岸の4県立病院（久慈、宮古、釜石、大船渡）に医師を派遣し直接的な地域医療支援を行うとともに、情報提供の同意を得た方の健康調査結果を、医療情報ネットワーク（久慈地域および気仙地域）や市町村に提供し、間接的にも被災地域の健康づくりに寄与しました。

久慈サテライト二戸出張所で
行われた健康調査

北三陸塾との連携に係る記者会見

◆バイオバンクの構築～次世代医療（個別化医療・個別化予防）の実現～

ToMMoとの合同シンポジウム
IMM佐々木真理機構長(左)とToMMo山本雅之機構長(右)

東北大学東北メディカル・メガバンク機構（ToMMo）と共同で、健康調査の過程でご提供いただいた生体試料・健康情報を集約し、両機構合わせて15万人規模の次世代バイオバンクを構築しました。当計画のバイオバンクは、他機関へ試料（DNA、血漿、血清、尿など）や情報（年齢性別情報、検査結果情報、調査票情報など）を分譲することで次世代医療の実現に向けた研究に貢献しています。高度にデータベース化された本バイオバンクの情報は、令和元年6月から一部が保険診療となったがんゲノム医療において対照群として利用されるなど、創造的復興に向け、一人ひとりの体質に合わせた個別化医療が社会実装されつつあります。

サテライトでの検体処理

◆今後の展望

当機構では、2021年度からの東北メディカル・メガバンク計画第3段階においても、健康調査と参加者への結果の返却を継続することで地域住民の健康維持に貢献するとともに、ゲノム・オミックス情報や血液検査、生理機能検査、生活習慣などの多様な情報を網羅した次世代バイオバンクの強みを活かしてゲノム医療基盤の構築と普及をさらに進め、個別化医療・個別化予防に向けたさまざまな研究開発を推進する予定です。特に、個々の遺伝的体質に合った高精度生活習慣改善プログラムの確立を見据えた独自の疾患発症リスク予測モデル（iPGM, iwate polygenic model）の開発やエピゲノム情報を用いた全ライフコース研究を学内外の研究者や企業と共同で発展させるとともに、国内の大規模ゲノムコホート連携をさらに推進していきます。また、事業進捗状況について広報誌やWebページなどを通して広くお知らせすることも継続していきます。

（文責：いわて東北メディカル・メガバンク機構）

■ いわてこどもケアセンター

◆子どものこころのケアの継続実施

いわてこどもケアセンターは、大震災後のさまざまなストレスを抱えて生活する子どもたちのこころのケアを中長期的に担う拠点施設として、2013 年 5 月、クウエート国・日本赤十字社の支援により矢巾キャンパス内のマルチメディア教育研究棟の一角に設置されました。児童精神科クリニックを併設し、県立宮古病院、県立釜石病院、県立大船渡病院に開設した 3 つの「ブランチ」での児童精神科診療とこころの相談を毎週実施してきました。

2019 年 9 月からは、内陸も含めた被災をした子どもたちの相談や地域支援の他、岩手医大附属病院児童精神科による沿岸での診療をサポートする事業を展開しています。

いわてこどもケアセンターのスタッフ

◆子どものこころのケア研修と人材育成、トラウマ治療の普及啓発

児童精神科の入院治療研修会

子どものこころのケアに関する研修会を企画し、全国の児童精神科医や子どものこころのケアの専門家を講師として招聘して、年数回ずつ開催してきました。震災トラウマ・ケアに関するテーマのみならず、地域の児童精神科医療発展のため、発達障害や療育、ゲーム・インターネット依存とその対応、不登校支援、子どもの行動上の問題、愛着と親子関係など、多岐にわたるテーマを取り上げ、多くの教育・福祉・医療関係者が一堂に会して学ぶ場を提供してきました。また、沿岸各地で多職種症例検討会を定期開催し、地域の専門職の資質向上・人材育成に尽力してまいりました。さらに、子どものトラウマ治療として効果の実証された「トラウマフォーカスト認知行動療法（TF-CBT）」を導入し、多数の実践例を積み重ねながら、全国への普及啓発に向けた研修会を現在も継続的に開催しています。

◆今後の展望

東日本大震災から 10 年間で、当時生まれた子どもは 10 歳に、5 歳だった子どもは中学校を卒業する年に、10 歳だった子どもは 20 歳の成人を迎える年となっています。被災年齢の違いが、子どもの発達にどのような影響を及ぼすのか、当センターは診療や研究事業を継続することによって、地域の子どもたちの成長発達を見守り続けてきました。未曽有の大災害が子どもたちの心身の発達や家族のメンタルヘルスに及ぼした影響と、有効な支援や介入、治療のノウハウについて、当センターに蓄積された記録をさまざまな角度から分析し、その活動の軌跡をしっかりと記録として残していくことが、災害多発国日本での次なる大災害への備えとして重要な意味を持つことになると考え、取り組んでまいります。

保護者のメンタルヘルスは、子どもの心身の発達に様々な形で影響します。子どもたちの健やかな育ちを支えるため、地域や学校、福祉機関と連携し、保護者支援や学校支援に取り組むことも最重要課題の一つと考えています。

（文責：いわてこどもケアセンター）

医学教育評価機構（JACME）による医学教育分野別評価が適合と認定されました

平成30年度に医学部で受審した医学教育評価機構による医学教育分野別評価において、1月18日（月）に「適合」と認定されました。

本機構は、全国の医学教育の質を国際的見地から保証することによって、医学教育の充実・向上を図り、我が国の保健、医療、福祉、衛生、並びに国際保健に貢献するため、医学部・医科大学等における建学の理念を確認するとともに、世界医学教育連盟（WFME）の国際基準をふまえて医学教育プログラムを公正かつ適正に評価することを目的としています。

認定証

岩手医科大学 医学部 医学科 殿

医学教育分野別評価の結果 評価基準に適合していることを認定する

－認定期間－

自 2021年2月1日 至 2028年1月31日

2021年1月18日
一般社団法人 日本医学教育評価機構
理事長 高久 史麿

本学部の適合認定期間は令和３年２月１日～令和10年１月31日までとなります。

国際小児がんデーによる小児病棟の患者さんの絵の作品展が開催されました

２月１日（月）～２月２８日（日）、附属病院２階のがん患者・家族サロンにおいて、小児病棟の患者さんの絵の作品展が開催されました。

毎年２月１５日は、国際小児がんの会が主導のもと「国際小児がんデー」と定め、世界各地で、様々なイベントやキャンペーンが開催されています。小児がん連携病院の指定を受けている附属病院においても、国際小児がんデーの趣旨に賛同し、小児がんに対する理解と支援の輪が広がることを目的としてこの催しが開催されました。

訪れた職員や患者さんは子供たちの絵を見て、笑顔で溢れていました。

絵の作品展ブース

附属病院で消防訓練が行われました

３月２日（火）、附属病院西６階C病棟、EHCU、及びSCUにおいて、消防訓練が行われました。

この訓練は、SCUからの出火を想定し、岩手医科大学附属病院消防計画に基づき、初期消火、通報、避難誘導が行われました。

当日は、看護師と事務局職員で構成される附属病院自衛消防隊や防災センターの方等、30名程が参加しました。

訓練参加者は、実際の災害を想定し、患者さんの命を守るため、附属病院自衛消防隊長の指示に従い、熱心に取り組んでいました。

火災を発見しスタッフステーションへ向かう第１発見者

患者さんを緊急退避させる避難誘導班

消火用散水栓で消火を行う初期消火班

高度看護研修センター特定行為教育課程修了式が挙行されました

３月８日（月）、附属病院10階中会議室において、高度看護研修センター特定行為教育課程の修了式が行われました。当日は、新型コロナウイルス感染予防のため、祝辞は代読で対応するなど学内関係者のみで執り行われました。

式には、１年間の研修を修了したAコース（呼吸器関連）２名、Bコース（創傷管理関連）５名、Cコース（在宅ケア関連）３名の研修生が臨み、修了生を代表して、本学附属病院の佐々木美里さんが木村センター長から修了証書を受け取りました。本学では、在宅ケアのニーズを見据えて、2020年４月に、本教育課程に「Cコース（在宅ケア関連）」を新設しており、今回初の修了生を輩出しました。

木村センター長は式辞で「特定行為研修看護師として各自の臨床現場でチーム医療の向上を目指してほしい」と激励しました。また、研修生を代表して南昌病院の昆野未穂さんは「患者さんが住み慣れたまちで安心して暮らせるように、特定行為研修看護師として培った専門性をいかしたい」と決意を述べました。

修了証書を受け取る佐々木美里さん

修了生代表挨拶をする昆野美穂さん

新型コロナウイルスのワクチン接種が始まりました

３月６日（土）、新型コロナウイルスワクチンが附属病院薬剤部に納品され、３月８日（月）から本学教職員を対象にワクチン接種が始まりました。今回は希望者全員分のワクチンが確保できていないことから、医療面接や身体診療を担うファーストタッチ部門を優先して接種されました。

当日は、受付を済ませた後、医師による問診があり、ワクチン接種後、待機スペースで15分間容体の観察が行われました。会場には、副反応に備え、医師・看護師が常駐し、緊急用の薬品やストレッチャーが準備されました。

１回目の接種を終えた方は３週間後に２回目の接種が予定され、その他の希望者は、ワクチンが確保でき次第、４月以降、順次接種開始が見込まれています。

本学接種第１号となった小笠原病院長は、「本学の職員は医療機関職員として自分自身を感染症から守る必要がある。積極的に接種してほしい」と呼びかけました。

専用フリーザーで保管されるワクチン

本学ワクチン接種第１号の小笠原病院長

トクタヴェール３階（矢巾会場）

令和2年度岩手医科大学医療専門学校の卒業式が挙行されました

3月9日（火）、医療専門学校上ノ橋校舎において、令和2年度医療専門学校卒業式が挙行され、歯科衛生学科32名の卒業生を送り出しました。新型コロナウイルス感染予防のため、祝辞等は書面により配布され、保護者の出席もご遠慮いただくなど、最小限の人数で執り行われました。開式に先立ち、三浦校長の挨拶があり、東日本大震災で犠牲となられた方々に黙祷を捧げ冥福を祈りました。

式では、三浦校長から「医療現場では、冷静に状況を確認し、的確な判断、そして報告・連絡・相談を忘れずに普段から緊急時のリスクマネジメントを考慮した医療活動を心掛けてほしい」と式辞があり、小川理事長（代読：佐藤歯科医療センター長）は「諸君の仕事には多くの方々が期待しています。その期待に背くことなく、大いに活躍して頂きたい」と祝辞を寄せました。

式終了後、卒業生からお世話になった教員へ3年間の感謝の気持ちを込めて、サプライズで感謝の品が贈られました。

代表して卒業証書を受け取る三上穂乃佳さん

集合写真

お世話になった教員へ感謝の品を渡す卒業生

令和2年度岩手医科大学卒業式が挙行されました

3月12日（金）、令和2年度岩手医科大学卒業式が大堀記念講堂において厳かに挙行されました。新型コロナウイルス感染予防のため、出席者を限定し、卒業生は各研究科・学部の代表者、教員は教授のみとしました。参加が叶わなかった卒業生と保護者のため、ライブ配信が行われました。

この式では、本学にとって初めてとなる看護学部卒業生を送り出しました。祖父江学長は「感動する心を大切に、大いにチャレンジしてほしい」と式辞を述べ、小川理事長は「日々自らを研鑽し、日本、そして世界の医療のために大いに活躍してほしい」と祝辞を述べました。

卒業生を代表し、看護学部第1期生佐々木瑞恵さんは「建学の精神である「医療人たる前に、誠の人間たれ」のもと、岩手の地で医療人を志し勉学に励んだことへの誇りと感謝を忘れず、誠の医療人を目指すべく日々精進していきます」と力強く抱負を語りました。

令和２年度岩手医科大学卒業生			
医学研究科博士課程	6名	医学研究科修士課程	4名
歯学研究科博士課程	4名	薬学研究科博士課程	2名
医学部	142名	歯学部	53名
薬学部	80名	看護学部	93名

祖父江学長式辞

小川理事長祝辞

卒業生代表宣誓

最終講義が行われました

3月8日（月）、大堀記念講堂において、3月31日付をもって定年退職される教授の最終講義が行われました。

聴講者は、各教授によるスライドや在職中のエピソードなどを交えた熱心な講義に耳を傾け、名残を惜しみました。講義終了後には、職員や学生から各教授に花束が贈呈され、惜しみない拍手が送られました。

「医療の質と安全確保を求めて」

共通基盤看護学講座
嶋森 好子 教授

「天然物の生合成から生物合成へ」

薬科学講座天然物化学分野
藤井 勲 教授

「看護教員として突っ走った37年、今私が言えること…。」

共通基盤看護学講座
三浦 まゆみ 教授

「アルツハイマー病予防サプリメントの開発とコーチング」

生物薬学講座神経科学分野
駒野 宏人 教授

「境界線を考える」

地域包括ケア講座
宮本 郁子 教授

「毀誉褒貶（きよほうへん）の間を歩むことについて」

睡眠医療学科
櫻井 滋 教授

「機能を"見える化"する試み」

生理学講座病態生理学分野
佐原 資謹 教授

「これからの小児医学、これからの小児医療」

小児科学講座
小山 耕太郎 教授

「X線と39年」

物理学科
佐藤 英一 教授

左から：嶋森教授、三浦教授、宮本教授、佐原教授

左から：佐藤教授、藤井教授、駒野教授、櫻井教授、小山教授

表彰の栄誉

中央臨床検査部の相原 みゆき 臨床検査技師が画論 The Best Image 2020で超音波腹部部門最優秀賞を受賞しました

この度、画論 28th The Best Image（令和2年12月20日、オンライン開催）において「超音波腹部部門最優秀賞」を受賞しました。画論は、画像診断技術の発展と医療貢献を目的として1993年に設立された学術イベントで、診断・治療に必要な画像のクオリティ、撮影・処理技術の工夫、臨床的価値や討論など総合的に審査が行われます。演題は「肝細胞癌」で、超音波装置に搭載されたハイエンドの映像化手法を駆使し、複雑な腫瘍血流動態の変化を非侵襲的、経時的に観察し、詳細な病態解析を行った点が評価されました。超音波検査は、CTやMRIより時間・空間分解能が高く、リアルタイムで体内の画像を抽出でき、他の画像診断では困難な小さな病変の抽出が可能で、患者さんに寄り添う非常に身近で有用な診断ツールです。今後も更なる技術力向上を心掛け、臨床の要望に応えられるよう精進して参ります。

受賞にあたり御指導、御協力いただいた皆様方に深謝申し上げます。

（文責：中央臨床検査部 臨床検査技師 相原 みゆき）

左から：滝川教授、黒田特任准教授、相原臨床検査技師、諏訪部教授

理事会報告　（１月定例ー１月25日開催）

１．名誉教授の称号授与について

佐藤　英一（教養教育センター物理学科）
嶋森　好子（看護学部共通基盤看護学講座）
末安　民生（看護学部地域包括ケア講座）
（称号授与年月日2021年４月１日付）

２．役職者の選任について

副学長（歯学部改革担当）　三浦　廣行（再任）
歯学部長　三浦　廣行（再任）
薬学部長　河野　富一（新任）
看護学部長　三浦　幸枝（新任）
（任期　副学長（歯学部改革担当）、歯学部長は、2021年４月１日から１年間、薬学部長は、同日から３年間、看護学部長は、同日から２年間）

３．附属病院規程の一部改正について

附属病院中央診療部門の組織体制強化を図るために、各室とセンターに副室長、副センター長の職を置き、また臨床工学部のスタッフ育成強化と業務調整に係る管理体制を構築するために、技師を統括する士長の職を置くこととし、附属病院規程を一部改正することを承認した。

（施行年月日2021年２月１日付）

お知らせ　大学報を隔月発行（奇数月）に変更します

岩手医科大学報は、大学の運営方針、行事及び教育・研究・医療等に関する情報提供及び学内の融和を図ることを目的とし、昭和 34 年６月に岩手医大月報として第１号を発行しました。平成４年６月（第 304 号）からは岩手医科大学報に名称を変更し、平成 22 年４月（第 403 号）からは日々進展する総合移転整備計画等の迅速な情報提供のため、毎月発行してきました。

今般、本学の歴史にとって大きな転換点となる附属病院の矢巾キャンパスへの移転が完了したことから、次号以降（第535号）奇数月による隔月発行といたします。これに合わせてレイアウトをリニューアルし、内容の充実を図る予定です。学内の情報をより分かりやすくお伝えし、皆様の役立つ情報を提供していきますので、今後も積極的なご意見・ご寄稿をお寄せいただきますようよろしくお願いいたします。

すこやか

スポット医学講座

No.99

皮膚科学講座　講師　大西 正純

足の裏のほくろ

「ほくろ」とは

小型の色素性母斑の一般的な呼び名です。色素性母斑には生まれつきみられる「先天性」と幼児期以降に生じる「後天性」があり、大部分は後天性の色素性母斑です。日本人では「ほくろのガン」と呼ばれるメラノーマの発生が足の裏に多いことから、足の裏のほくろを気にして皮膚科を受診される方が多くいらっしゃいます。今回は足の裏のほくろの見分け方についてお話します。

足の裏のほくろの見分け方

日本人の10人に１人は足の裏にほくろがあるといわれていますが、日本人におけるメラノーマの発生頻度は10万人あたり１～２人程度ですので、足の裏のほくろも大部分は良性の色素性母斑です。また、10歳以下のお子さんではメラノーマが生じることはまれですのであまり気にされなくても大丈夫です。

足の裏のほくろの見分け方ですが、メラノーマを疑うほくろの大きさの目安は７mm以上です。これは鉛筆の直径と同じくらいの幅ですので参考にしてみてください。また、①左右が非対称、②境界がはっきりしない、③色調に濃淡があるなどの特徴があるほくろはメラノーマの可能性があるため注意が必要です。

ほくろの診断として、皮膚科医はダーモスコピーという拡大鏡を用いた観察を行います。ダーモスコピーによる検査は痛みもなく時間もかかりません。手のひらと足の裏の皮膚をダーモスコピーで拡大して観察すると平行した溝が確認できます。皮溝に色素が強い場合は色素性母斑が、皮丘に色素が強い場合はメラノーマが多いと言われています。ダーモスコピーでこれらの特徴を観察し、メラノーマが疑われた場合は皮膚生検を行い、顕微鏡による組織検査を行います。

最後にブラックヒールと呼ばれる角層内の出血や抗がん剤などの薬剤による色素沈着など、ほくろ以外でも足の裏に黒い病変が生じることがあり、メラノーマと診断が難しいケースもあります。気になる足の裏のほくろがあれば皮膚科を受診し、ダーモスコピーによる診察を受けることをお勧めします。

色素性母斑のダーモスコピー像

メラノーマのダーモスコピー像

《岩手医科大学報編集委員》

小川　　彰　　佐藤真結美
影山　雄太　　工藤　静子
松政　正俊　　工藤　正樹
齋野　朝幸　　及川　弘美
藤本　康之　　安保　淳一
白石　博久　　佐々木忠司
成田　欣弥　　畠山　正充
遊田由希子　　藤村　尚子
佐藤　　仁　　武藤千恵子
小坂　未来　　髙橋　　慶
藤澤　美穂

編集後記

2021年3月、東日本大震災から10年という月日が経過しました。被災された方々には改めて心よりお見舞い申し上げます。3月号では「震災から10年～医療復興を目指した災害復旧事業本部の取り組み～を特集記事として掲載しています。10年が経過してもなお様々な局面で復興のための道程は継続しています。

また今年度は新型コロナウイルス感染症との闘いの年月でもありました。最前線で感染症と闘う皆様に心からエールを送ります。本学でも医療従事者にワクチン接種が開始しています。本号のトピックスでその様子をお伝えしています。新年度も新型コロナウイルス感染症克服のための努力は続きます。岩手医科大学報が私たちの「絆」を深めるお役に立てればと願っております。

（編集委員 佐藤 仁）

岩手医科大学報　第534号

発行年月日　令和３年３月31日
発　行　学校法人岩手医科大学
編集委員長　小川　彰
編　集　岩手医科大学報編集委員会
事務局　法人事務部　総務課
TEL. 019-651-5111（内線5452、5453）
FAX. 019-907-2448
E-mail: kouhou@j.iwate-med.ac.jp
印　刷　河北印刷株式会社
盛岡市本町通2-8-7
TEL. 019-623-4256
E-mail: office@kahoku-ipm.jp